ワクワク留学体験記

ISIR – Université Paris 6

佐藤未知(電気通信大学)

学内食堂でのランチタイム(右が筆者)

1. はじめに

誰が呼んだか「華の都」。2008 年の LavalVirtual へ参加した際に 2 日ほどパリに滞在したことがある。景色を記憶することが苦手な私であるが、セーヌ川を周遊する遊覧船(Batobus)から見た、”Université Paris 6”と書かれた古めかしい建物は今でもなぜか覚えている。その姿は長く伝統を刻んだパリ大学の歴史を思わせるものであったが、当時の私が思ったのは「パリっていくつ大学あんの？」であった。もちろん、2 年後に自分がそこへ通うことになるとは露ほども考えていなかった。

2. 経緯

留学のチャンスを得たことを知ったとき、真っ先に浮かんだ行き先がフランスである。エミール・ガレもダフトパンクもフランス人なのだから、私の行くべき場所はフランス以外には無かった。

私は触覚とヒューマンインタフェースが専門なので、フランスの研究機関でそれらの分野を調べてみると Vincent Hayward 教授がパリにおられるという。Hayward といえば触覚界ではスターの御大である。恐れ多くもコンタクトを取り、2010 年の 7 月にオランダで行われる触覚系の学会 EuroHaptics に双方が出席予定であることが分かったため、会う約束を取り付けた。学会当日に Hayward 教授に会い、教授があまりにも良い人であったために私の壊滅的な英語力が露呈したにも関わらず快く留学の受け入れを引き受けていただいた。

当初は半年ほどの滞在を予定していたが、フランスの「長期研究者ビザ」取得に必要な悪名高きコンバンション・ダキュイ(旧プロトコール・ダキュイ)という書類の不備のためビザ取得はならなかった。ビザがなくともシェンゲン国では 90 日までの滞在ができるため、2010 年 9 月から 12 月までを留学期間として私は旅立った。なお、これが私の初めての一人暮らしである。そして当然フランス語は分からない。

3. UPMC・ISIR

Hayward 教授の所属が Université Paris 6(パリ第 6 大学)だと知ったのは出発する直前のことである。現在では大学の名称が Université Pierre et Marie CURIE(ピエール・マリキュリー大学。以下 UPMC)になっているので、最初はそれらが同一の大学と気づかなかった。パリ大学は別名ソルボンヌと呼ばれ、パリ及びその近郊にある計 13 の大学の総称である。UPMC はその中でも特に理学、工学、医学を主とする大学であり、キャンパスはドゥニ・ディドロ大学(第 7 大学)と併設。大学名の由来はもちろんキュリー夫妻である。教授はこの大学の Institut des Systemes Intelligents et de Robotique(ISIR)という研究科に在籍している。ISIR は特にロボティクスに特化した研究科で、在籍するのは基本的に博士課程以上である。

4. 研究

Vincent Hayward は地球で一番親切な人なのではないかというくらい親切な人で、研究から生活面ま

で様々なところで面倒を見てくれた。しかし同時に非常に忙しい人でもあり、多いときは週に 3 回の国外出張が入るときもある。留学で苦労した点は多くあるが、一番は教授とのコンタクトが取りにくいということであった。
他にも苦労したことは多くあった。もちろんそれを体験しに行ったわけであるが。まず毎日 18 時には研究科の人間の多くが帰り、19 時には建物が完全撤収となる。当然土日は建物内に入れない。おかげでプライベートが大変充実してしまった。
またハードウェアを扱うことが多い分野・研究であるにもかかわらず研究資材をストックしておくという感覚があまりないため、発注しなければアルミ板もナットもセラコンもなかった。日本にいたときは資材が身の回りに豊富だったために、あまりプランを練ることなく思うままに手を動かしていた(環境のせいではなく自分のせいなのだが)。ISIR では見積書から作る必要があるため基本的に失敗ができない。おかげでかつてなくプランニングをじっくりやる経験ができた。そして余分なトライ&エラーは減り、慣れるとそれでも結果的にかかる時間はあまり変わらないことも分かった。これはショックである。いままでどれだけの資材を無駄にしてきたのだろうか。
研究室のメンバーは出身 8 カ国からなる国際色豊な面々であり、つまり殆どが外国人であるため短期間で異常に仲良くなることができた。今回の留学で得た最も大きな財産は、彼ら素晴らしい友人達を多く得たことである。

5. 生活

パリの物価は高い。東京と同じくらいである。しかし食料自給率 120%の農業国というのは伊達ではなく、自炊する限りは日本の日当で一ヶ月の食事がまかなえるほど安い。フランスではパリ周辺に限ってその地区の「田舎度」を定量化しており、パリ市内を Zone1 としてパリから離れるほど Zone2、3 と数字が高くなっていく(本当はただの鉄道会社による運賃のエリア分けである)。私が住んでいたのは Zone2 の格安寮で、アジア人を中心とした多くの外国人が住んでいた。Zone2 に行くと随分と物価も良心的になり暮らしやすいが、反面ほとんどの商店で英語が通じなくなる。ISIR の公用語が英語であったのでフランス語を学ぶつもりはなかったのだが、途中から諦めてフランス語を学ぶことにした。あとから考えるとフランス語が話せなければ乗り切れなかったような危機的状況も多々あったので、フランス語は勉強して本当によかったと思う。

Hayward 教授(左)と研究室のメンバー

6. おわりに

留学に寄せて私の感想を一言で表すならば、「留学してよかった」ではなく「留学しなければ危なかった」である。
今回の留学は日本学術振興会「研究者海外派遣基金助成金(組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)」によって行われた。昨今の政策による研究者育成予算削減の徹底ぶりには驚くばかりだが、今回の助成金も残念ながら次期以降の公募は実施されないことに決定した。つまり平成 21 年度公募をもってスタートしたこの事業は、それが最初で最後のものとなってしまった。
我々の世代の視点からすれば眼前の道がますます狭まる日々である。あるいはこれを海外へポストを取りに行く契機と前向きに捉えるならば、留学経験はいよいよ「最低限必要」のものとなる。しかし私費以外ではそのチャンスも日々失われている。私は今回留学しなければ、危なかったのだ。

最後になりましたが、このような代え難い機会を与えていただいた日本学術振興会、並びに日本から突然来た無礼な学生を快く受け入れてくださった Vincent Hayward 教授、初めての海外生活に先立ち戦々恐々としていた私の背中を「行って来い」と強く押してくださった指導教員の梶本裕之先生、また不在時の様々な問題をフォローしてくれた研究室のメンバーに、心より御礼を申し上げます。

【著者略歴】
佐藤未知
電気通信大学大学院 博士前期課程 2 年。触覚、ヒューマンインタフェース研究に従事。主な研究テーマとしてハンガー反射など。